

Fate/Apocrypha ~星に願いを~

風鈴火山

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖杯大戦。

十四対十四、最大規模の聖杯戦争。

その中に篝星が煌めいた。

Fate/Stardreamを書き直した作品です。

星のカービィとFateのクロスオーバーです。

他にオリ設定・擬人化などがダメなお方はご注意を。
というかなんでも許せる方向けですね。

目 次

星の陣営	——
“地”の陣営	——
その少年、春風の如く	——
“地”に潜む不穏	——
戦前——束の間の平穏	——
作られた願望（ユメ）	——
太陽と春風	——
戦場（いくさば）に戦士二人	——
ラーマの如く	——

41 37 31 25 21 16 10 5 1

“星”の陣営

ルーマニア、トランシルヴァニア地方に位置する都市トウリファース。

その街の面積の半分を占めるトウリファス最古の建築物 “ミレニア城塞”。

普段は人気もなく、私有地ということも手伝つて幽霊屋敷のような認識をされているこの城塞は物々しい雰囲気に包まれていた。

忙しく動く、ホムンクルス人造人間。

のそりとうごめく、虫と人が混ざつたような容姿をした兵士。彼らはただ主達の命に従い正しく戦準備を行つていたのである。その城塞の地下の空洞には一族の長、ダーニック・プレストーン・ユグドミレニアが六十年を容易く超える時の間隠匿してきた大聖杯が納められていた。

ただし、大聖杯は本来のそれではないのだが。

神々しい輝きを放ち膨大な魔力を秘めていた大聖杯は鋼鉄の外殻に覆われ、中心を通る位置には不気味な紋様の浮かぶ円筒がそびえていた。

その円筒には翼のような装飾がなされ、上部には目のような黄色の石が嵌め込まれて怪しく光を放つっていたのだ。ソレを眺める二つの人影。

——白を基調とした貴族服を纏う墨色の髪の青年

一族の長、ダーニック・プレストーン・ユグドミレニア。

——ラビスラズリ瑠璃色にローズピンクが混じった髪色をした絶世の美女

ダーニックのサーヴァントであるキヤスター。

「素晴らしい。まさしく万能の願望機よ」

そう呟いたのはキヤスター。

傍で傳くダーニックもこの光景に概ね満足していた。

彼の計算外は、強奪した大聖杯の輸送の時に起こつた。

というのも、彼の予想よりも早く本格的な戦闘になつた第二次大戦の混乱に巻き込まれたのだ。

それによる大聖杯の破損。

一族の再興を懸けていた希望が傷ついた光景に一度絶望したダーニックだったが、諦めずに欠片から修復を試みた。

しかし、大聖杯を創りだしたのは彼のアインツベルン。

創造はもちろん、修復さえ容易なことではなかつた。

ダーニックが慎重に修復を続けて五十年。

その時期から聖杯大戦に対する計画を練りはじめていた彼の一族に新たに加入した者達が居た。

ゲインズ・インカム・ハルトマン率いる一族だ。

ハルトマンの手によつて大聖杯は瞬く間に修復・改造されたが、確かに願望機という機能が正常になつて再び真の聖杯戦争が起ころうとしていたのである。

深夜2時。

召集された五人の魔術師が魔方陣の前に立ち、各自触媒を祭壇に配置する。

そして、一斉に英雄を呼ぶ詠唱を開始した。

「素に銀と鉄。礎に契約の大公。

——願いを託すは『星』

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る
三叉路は循環せよ。
閉じろ閉じろ閉じろ閉じろ閉じろ閉じろ

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」
魔方陣に魔力が通り、広間は光で満たされる。

此処で四人は詠唱を止め、一人が詠唱を追加する。

「——されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。

汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者」
高まつてゐる魔力は此処に英雄の降臨を予感させるに充分な威容
だらう。

魔術師達はそう確信して叫ぶ。

「汝三大の言靈を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

その日、五人の英雄が集結した。

五騎のサーヴァントがまばゆい光から姿を現す。

『剣兵』

——白銀の鎧に全身を包んだ騎士
『槍兵』

——銀の軽鎧を纏つた、若草色の髪の青年
『弓兵』

——森のように清冽な気配をした青年
『騎乗兵』

——春風の如き空氣を纏う桜色の髪の少年
『狂戦士』

——体に機械が取り付けられた、白いドレスの少女
「ほう……」

「女王の配下となる、一騎当千の英雄達です」

感心したような声を零すキヤスターにダーニックが口添えする。

五人の英雄は誇りに満ちた声を広間に響かせる。

恰幅がよい男——ハルトマンは歓喜に打ち震えている。

「召喚の呼び声に招かれ、参上した」

ピンクの髪の女性——スージーは興奮を隠しきれない。

「我ら“星”のサーヴァント」

小太りの男——ゴルド・ムジーク・ユグドミレニアは感嘆の声を洩らす。

「我らの運命は千年樹ユグドミレニアと共にあり」

車椅子の少女——フィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニアは目を見張る。

「我らの剣は、あなた方の剣である」

眼鏡をかけた少年——カウレス・フォルヴェッジ・ユグドミレニア
はゴクリと喉を鳴らした。

威風堂々たる英雄達、『星』のサーヴァント。
ダーニックはほくそ笑む。

この戦いの先に、一族の栄光があると信じて。

“地”の陣営

ロンドン。

魔術協会の総本山『時計塔』

古株の貴族達が踏ん反り返り、新進気鋭の若き魔術師達が切磋琢磨する学び舎。

その廊下を悠々と歩く男が居た。

深碧色の長髪の男は目的のドアを見つけるとノックをした。

「入りますぜ、ベルフエバンの爺さん」

「ヒヨヒヨヒヨ。久しいの、茨の猛犬」

ドアの向こうで待っていたのは特徴的な笑い声を響かせる眼鏡の老人だ。

年季の入った椅子をクルリと回して老人はこちらに振り返った。

「獵犬は、どうにも好みじゃねえ。猛犬がいいな」

軽口を叩くケルに対し時計塔“召喚科”学部長ロツコ・ベルフエバンは意地の悪い笑みを浮かべている。

「トウリファスの一件は聞いているな?」

「ああ、もちろんだ。ユグドミレニアの鎮圧に向かつた魔術師が全滅しちまつたんだろ?」

ベルフエバンは重々しく頷いた。

唯一生還した、というよりかは生還させられた魔術師が持たされていた、紅い宝石から映し出された映像が脳裏に浮かぶ。

魔術協会より派遣された魔術師達はミレニア城塞を目前にしていた。

誰もが、戦闘に特化した殺しのプロ達。次々と結界を突破して進行していく。

——他愛ないな。

慢心を隠さず一人の男がそう呟いた。

その男が手をかざしてまた一つの結界を破ろうとしたその時——
閃光が走り、男とその周りを一瞬で消し去った。

地面に窪みができた光景を前に傍に居た魔術師達も狼狽する。
混乱しながら、誰かが上を見上げようとした瞬間だつた。

「その汚らわしい眼で妾を辱めようとするか、鼠が」

氷のように冷たい声が響き渡つた。

魔術師達が反応し皆一様に声の方向を見ようとすると、その視界は瞬時に茨で埋め尽くされた。

その様に圧倒的な力量差を感じ恐慌状態に陥つた魔術師達は虚空に浮かぶ無数の魔方陣に既に包囲されていた。

「泥でも啜つておるが相応の鼠風情が、この美貌を目に入れようなど思ひ上がつたものよ」

爆音が轟き、地面には何かが焼け焦げた跡だけが残つていた。

「奴らはサーヴァントを召喚し、魔術師を迎撃したのだ」

ベルフエバンは告げた。

それに対しケルは不信感を隠さずに言う。

「おいおい、サーヴァントと戦えつてんならお断りだぜ？ 無駄死には一番嫌いなやつだ」

「命は惜しまぬと言いながら勝ち目がないのには行かない。
相変わらずだの。まあ安心しろ。

——お主にはサーヴァントを召喚しマスターとして戦つてほしいのだ」

「はあ？」

間抜けな声をあげたケルに対しベルフエバンはニタリとした笑みを崩さない。

「大聖杯は状況に応じて聖杯戦争の補助を行うそうでな。全サーヴァントが一つの勢力に統一された場合対抗するサーヴァントの枠を用

意するシステムも存在していた

「それをその生き残りが起動させてたつてことか」

ベルフェバンは頷き、ケルは思案する様子だ。

そして何かを決めたように口を開いた。

「幾つか質問いいか？」

「ああ」

「一つ。サーヴァントを召喚する触媒」

「もちろん、こちらで用意してある」

そう言つてベルフェバンはケースを取り出した。

開かれたケースの中に入つていたのは鎌が赤茶けた矢だった。

「なんだこりや？」

「とある英雄が猿を射殺した矢だ」

「それって——」

ベルフェバンは何も答えない。

それこそがその矢の正体を如実に告げていた。

「……一つ。こっちのマスター——」

「我々が派遣したのはこの五人だ」

「——なるほど。こいつらなら殺し合いしたり背中預けたりの仲だ。
問題ねえ」

「そして聖堂教会から派遣された監督官兼マスターだ」

「この規格外の戦いに監督官とかいるのか？」

ケルが「ぐくぐく自然な疑問を投げかける。

それに対しベルフェバンはあちらに肩入れされても困るための措置だと答えた。

「なるほどね……ちなみにだが、勝つたら聖杯はどうするんだ？」

「勝利の後、我々が確保する。無論、根源に容易く辿り着く代物を前に魔術師が冷静でいられるかは保障せんがな」

魔術協会も確保の手配を進めているだろう。

しかし、もしそれをかい潜ることができたのなら。

つまりはどうなろうが自己責任なのだ。

その全てを理解したケルの瞳は参戦の意思を無言で語っていた。

「OK。その依頼受けた。ただし、報酬は一部前払いで、2000万ほど頂きたい」

「用意しよう。契約成立だな」

用が済むと見るや、彼はそそくさと部屋を出て行つた。



ルーマニア、首都ブカレスト。

その外れの空き家にケルは居た。

「a
l
g
i
z」

彼はルーン文字を家の床に刻んだ。

a
l
g
i
zのルーンは保護・防御の意味を持つ。

それによって張られた結界に満足しながらケルは手慣れた様子で魔方陣を描きはじめた。

ケル・トライフ。

彼は、アイルランドの長い歴史を誇る魔術師の家系に生まれて育つたルーン魔術の使い手だ。

常に文字を刻むことで発動するルーン魔術を扱う以上魔方陣を描くことも難しくない。

魔方陣を描き終えたケルは持つて来ていたケースから矢を取り出した。

それを魔方陣の傍に置くと、詠唱を開始した。

「素に銀と鉄。礎に契約の大公。

——願いを託すは“地”——

ケルは自信を持つて呪文を紡いだ。

「——抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ!」

魔方陣より現れる閃光と暴風に思わず目を閉じた。

それが収まつたのを見計らつてはケル目を見開いた。

彼が呼び寄せた英靈は――

「サー・ヴァント、セイバー。召喚に応じ参上した。

――問おう。汝が、余のマスターか

気高き赤毛の少年だつた。

その少年、春風の如く

英靈召喚を終えて静まり返つた玉座の間。

魔術師達は誰もが口を開けずにいた。

そんな空氣を砂で出来た城を崩すように打ち壊したのはサーヴァント、桜色の髪の少年だ。

「はあ～い。こちらに注目！」

第一声はなかなか緊張感に欠けるものだつた。

彼はクルクルと軽快に回りながら他のサーヴァント達を見回す。ふと玉座に腰掛ける女キャスター王で視線が止まつたが、しばらくしてどこか安心したような穏やかな表情をして、彼はまた明るい表情に戻つて言つた。

「え～～、皆知つてる顔知らぬ顔あるとは思いますが～。

――自己紹介しようか！」

少年は今思いついたかのようにあつけらかんと告げた。彼はまずは自分からと、聞かれてもいいことを語る。

「ボクはライダー！ 真名はカービイさ！ よろしくね」

カービイとは、『アーサー王伝説』や『イリアス』を筆頭とするギリシャ神話等に並んでメジヤーな伝説『春風物語』の主人公である。平和な国。ップランドに訪れた旅人。

様々な敵を自らの特異な能力で打ち倒し幾たびも平和を守つた勇者である。

彼の人柄を代表する逸話はこれだろう。

――街の人間全員が三日かける料理を一人で、たつた一日で食らいつくす大食らい。

カービイは自分の自己紹介は終わつたのだから、当然とばかりに標的を捜す。

周りの視線などお構いなしに、手始めにと皮の軽鎧を纏う青年に歩み寄つた。

彼にはランサーと思しき青年も尊敬、歓喜を帶びた視線を送つてい

る。

「キミの真名は？」

「——サー・ヴァント・アーチャー。我が真名はケイローンです」

問い合わせたカービイにアーチャー——ケイローンは穏やかに答えた。

ケイローン。

大地と農耕の神クロノスと女神ピュリラーを両親に持つ、半人半馬のケンタウロス族が誇る大賢者。

ヘラクレスやアキレウス、イアソンをはじめ数々の英雄達を指導した人物。

しかし、ある時ケンタウロスとヘラクレスの争いに巻き込まれてヒュドラの毒矢を受ける。

彼はその地獄の苦しみに堪えられず、持っていた不死性を捨てることでようやく安楽の死を得られたという。

「——そつか。よろしくね、ケイローン」

「ライダー。真名ではなくクラスで呼びかけたまえ」

ダーニックがそう言つてカービイを窘めた。

真名はサー・ヴァントの正体。そのまま弱点を知らせることに繋がるからだ。

たとえばケイローンは死因となつたヒュドラの毒は天敵であるし、カービイも死因ではないが弱点として毛虫が存在する。

カービイのものは間抜けな話だが、そんなものにでも一瞬氣をとられれば英雄同士の戦いでは命取りとなる。

真名は秘匿するのが聖杯戦争の定石なのだ。

しかしカービイは軽く謝るのみであまり懲りた様子ではない。そんな彼は続いて若草色の髪の青年に駆け寄つた。

「キミの真名はなにかな？」

「——待て、ランサー。お前は喋るな」

カービイに答えようとした青年をゴルドが手で制した。が——

「我が真名はアキレウス！ よろしく頼むぜ、ライダー」

「なつ」

ランサー——アキレウスは構わず己の真名を告げた。

後ろではゴルドが顔を引き攣らせていて、アキレウス。

ヘラクレスと双璧をなすギリシャ神話の大英雄。

叙事詩『イリアス』にてトロイア戦争に参戦。

「兜輝く將軍」へクトールに翻弄されながらも、最終的には劣勢だつたアカイアの戦況を覆した。

しかし彼はヘクトールに友を殺されたことにより激昂し、討ち取った彼を戦車で引きずり回す暴挙に出る。

その振る舞いに激怒したアポロンの加護を受けたパリスによつて弱点である踵と心臓を射抜かれて疾風のような彼の人生は幕を閉じる。

つまり、サーヴァントになつた彼も踵は弱点なのだ。

そして真名が割れればそれはすぐに発覚することも確実。

そんなある意味心臓を晒すようなアキレウスの行為にゴルドは拳を握りしめて震えている。

「ランサー！」

「あく。まあ待てよマスター」

詰め寄るゴルドにアキレウスはまああと声をかける。

「アーチャーはケイローン。俺の師匠だぜ？　どうせ真名は分かることだろう」

「そもそも真名開示は申し合わせていたことじゃありませんの？」

アキレウスの言うことは最もであるし、スージーのからかうような言葉と視線にゴルドは歯ぎしりしながらも押し黙つた。

「うん。よろしくね、ランサー」

「応。そして先生、アンタも此処に呼ばれるとはな」

「貴方と肩を並べられるとは、聖杯戦争とは奇妙なものですね」

ケイローンとアキレウスが話しているのを後にして、カービィは白いドレスの少女に近づいていった。

「キミの名前は？」

「……ウウ……ア……」

唸り声をこぼす彼女にカービイは素早く彼女のクラスを察した。

彼女は『狂戦士』なのだろう、と。

バーサーカーは狂化によつてステータスを上昇させるが、引き換えて理性を失うクラスだ。

言語能力を失うのも仕方ないのだろう。

「ねえそこのおじさん。この娘の真名は？」

なのでカービイは傍にいた髪を蓄えた男——ハルトマンに声をかけた。

「……フランケンシュタイン」

ハルトマンは仮面で彼女の真名を告げた。

フランケンシュタイン。

正確にはヴィクトラー・フランケンシュタインがつくった怪物。

死体をつなぎ合わせてつくったそれは醜い怪物であつたとフランケンシュタインは拒絶し、逃亡する。

孤独な怪物は伴侶となるもう一人の人造人間をつくつてほしいと博士に願うもそれさえ拒まれてしまう。

最期には狂死した博士を見届けながら怪物もまた命を絶つことになる。

「そつか。よろしくね、フランケンシュタイン……は長いな。 „フランケン“でいいか」

「おいライダー、 真名」

ボソリと言うカウレスにゴメンゴメンと軽く謝るカービイ。

当のフランケンシュタインは不満げだ。

とはいえることでこのまま詰め寄つても仕方がないのがわかつているのか彼女も大人しくなつた。

最後にカービイが見たのは、白銀の騎士甲冑に身を包むサーヴァント。

十中八九セイバーだろう。

「じゃあ、キミはセイバーかな？ キミの真名は——」

「フン」

セイバーと思わしいサーヴァントは鼻で笑うと兜が機械的な音を

立てて分解されていった。

スージーはその光景に目を少々輝かせている。

そして兜の中から現れたのは勝ち気な表情を浮かべる少女の顔だった。

「我が名はモードレッド。騎士王アーサー・ペンドラゴンの唯一にして正当なる後継者」

凛々しい顔に似合わぬ獰猛な笑みを浮かべる彼女にもカービィはやはり朗らかに接する。

「よろしくね、セイバー」

しかし、セイバー——モードレッドはカービィの差し出した手を華麗にかわして去つていつてしまつた。

「ありや……」

「まあよい。戦ままだ時はある。各々自由にしておくがよい」

それまで見守っていた女王キヤスターのその言葉でこの集まりは解散となつた。



「——それで、お前はセイバー、真名はラーマで間違いないんだな？」

ケルはそう言つて目の前の英サーゴアント靈を見つめた。

「無論だ。汝こそ、余のマスターで相違ないな」

「たりめえだ

ラーマ。

インドの二大叙事詩の片割れ『ラーマーヤナ』の主人公。

彼は魔王ラーヴァナに拐かされた妻シータを救うべく猿ハヌマーンとその軍勢と共に戦い抜いた。

戦いの果て、見事ラーヴァナを打倒しシータを取り戻したラーマであつたが、彼は致命的な失策を犯していた。

味方の猿スグリーバを救うため、敵の猿バーリをだまし討ちにしたのだ。

これを怒ったバーリの妻の呪いはラーマとシータを永遠に引き離

すことになってしまった。

少年の姿に似合わぬ尊大な態度をとるセイバーはどこか背伸びをしているような印象だ。

しかし彼はサーヴァント。

並の魔術師など吹いて飛ばしてしまうような実力の英雄だ。

悔るようなことはもとよりするつもりはなかつた。

だから――

「ほれ

「？」

ケルは赤い厚紙に包まれたそれを彼に差し出した。

「なんだこれは？」

「チョコつてやつだ。いま現代の食い物でな、俺の好物だ」

食つてみろ、と召喚早々に促すマスターの雰囲気にセイバーは恐る恐る口をつけた。

パキリ、と音が鳴つて、欠片は口の中で甘みと共に溶けていった。

「そいつはまあ、挨拶みたいなもんだ。仲良くやっていこうぜ」

「…………ああ」

彼を召喚する触媒となつた、妻と引き裂かれる切っ掛けの象徴は新たな縁をもたらすことになる。

“地”に潜む不穏

ルーマニアの都市、シギシヨアラ。

中世の町並みを残す趣深い通りを歩く男の姿があつた。

深緑を基調としたスーツを着るケルは“地”的マスターの集合地であるシギシヨアラの教会を目指していた。

天蓋付きの階段を上つた、その先には一人の少年が佇んでいた。

「はじめまして。貴方が、ケル・トライフさんですね？」

「そういうお前さんは、教会から派遣されたっていうシロウ神父であつてるかね？」

頷いた少年——シロウは微笑みながらケルの先を歩きゆつくりと教会の扉に手をかけた。

中は清潔にされ、厳かな雰囲気が漂っていた。

その内部を見渡してケルは懐疑的な表情に変わる。

「どうしましたか？」

「他のマスターはもう来てるって話だつたが」

「彼らなら既に行動を開始していますよ」

返答を聞いてもケルの目は疑惑を宿している。

それに気づいているのかいないのか、シロウは彼を小部屋に案内していく。

『サーヴァントはいるか、セイバー?』

そう念話で自分のサーヴァントに問い合わせた。

『いや、わからん。……だが、アサシンが潜んでいるやもしれぬ。実体化させてくれ、マスター』

「お連れのサーヴァントは実体化させないのでですか？」

セイバーとシロウの二人からそう言われて、ケルはああ、ぶつきらぼうに答えた。

未熟ながらも確かな王の霸氣を持つ赤毛の少年が虚空より姿を現した。

少年をシロウはなにやら品定めをするような目で見つめていた。

「…どうした」

「いえ、なんでもありません」

首を横に振つてそう答えたシロウ。

それではこちらも、と彼が己のサーヴァントの名を呼んだ。
現れたのは、暗闇のようなドレスを纏う退廃的な美女だった。

「私は“地”のキヤスター。よろしく頼むぞ、ケルとやら」

——セイバー殿もな。

そう妖艶な表情で言うキヤスター。

双方が顔合わせ、簡単な自己紹介を終えてシロウは本題を切り出した。

「さて、早速ですが現状報告を。ユグドミレニア側は既に七騎のサーヴァントを召喚。アサシンを除く六騎はミレニア城塞に待機しています」

「なるほどな。真名が割れた者は」

「残念ながら」

真名が判明していないのは仕方がないことだろう。

むしろ戦いさえまだ始まつていないのだから当然と言える。

「ですが、ステータス程度ならば確認できています」

シロウはそう言つて資料を差し出した。

それを見ていたケルは違和感を覚えて、眉をひそめる。

「んだ、このキヤスターのステータス。真名が知名度のある英靈だとしても、妙に高いぞ」

ケルが訝しげに見たのは“星”的キヤスターのステータス。

筋力：B 耐久：C 敏捷：B++ 魔力：A 幸運：E 宝具：
A+

キヤスターのステータスは基本的にこの程度だ。

筋力：E 耐久：E 敏捷：C 魔力：A 幸運：B

英靈は知名度・マスターの能力等によつてステータスが多少上下するといつても筋力・耐久・敏捷の三つ全てがC以上になるのはキヤスターのサーヴァントとしては不自然なのだ。
まるで狂化でもかけたかのように。

「この三つがここまで高いのは妙だ。殴り合いですんのか、あつち

のキヤスターは?」

「さて、美貌も伝承通りだとするならば、剣を振るい魔術を使う英靈には心当たりがありますが」

シロウがそう言う隣で、心なしかキヤスターが彼に向ける視線が厳しくなった気がする。

ケルもその条件が揃うサーヴァントには一人心当たりがあつた。

クイン・セクトニア

“春風物語”に登場した浮遊大陸フロラルドの女王。
クイーンの語源とも言われる。

神にも等しき美貌の持ち主ともされるが、傲慢で冷酷な女王であつたとされる。

地上の侵略を目論むも、カービィによつて倒された“妖艶の悪女”。

魔術はもちろん剣の使い手だという伝承のためセイバーの適性もあると思われる。

……結局、ステータスが不自然に高い理由は解明できていないのだが。

「とはいえた。コイツの可能性は高いな。それにどつちにしてもこのキヤスターはバツチリ準備してるんだ。十中八九“工房”、下手すれば“神殿”を造つてゐるかもしけん。ぶつかるこつちのサーヴァントは大丈夫か?」

「ええ。そちらのセイバーも優秀なようですし、ランサー、アーチャー、バーサーカーもこのキヤスターに拮抗する力を持つと断言できます」

「そいつはいい」

「ともあれ、これでこちらも七騎揃いましたね。——さて、セイバーの真名を教えていただけますか?」

シロウの要求に黙り込むケル。

命を預ける味方ならば戦力は明かした方がよいだろう。

しかし、どうにもこの主従は胡散臭い。

『セイバー、お前はどうだ?』

『余は……反対だ。このアサシンの目は、他を省みぬ暴君の目だ』
『そうかい。暴君と“理想王”なら、まあお前さんのほうがいいわな』

セイバーの意見を聞いて決意したケルはゆっくりとソファから立ち上がった。

シロウはおや、と声を出して呼び止める。

「どちらへ？」

「俺のサーヴァントは“最優”なんでな。悪いが勝手にやらせてもらはず」

「我々と共同戦線を張る気はないと？」

「別にあんたらと敵対するわけじゃねえんだ。遊撃隊とでも思つてくれ」

ニヤリと不敵な笑みを見せて彼らは教会を去つていった。
バタリとドアが閉じたと同時にケルは全力で走り、階段を駆け降りた。

「ハツ、ハツ……追っ手はいるか、セイバー？」

『いや、いないな。だがアサシンもあちら側かもしだぬ。油断するな』
念話で忠告するセイバーにそうか、と返した。

『……マスター。余はな、少し安心したぞ』

何氣なくセイバーが語りかけてきた。

「何に？」

『汝があの怪しげな者どもに与する男でなくてな。——やはり、共に戦う者は勇士がよい』

「そうかい。俺が勇士なんて立派なもんになれるかね……ま、仲良くやろうぜ」

——なかなか良い相棒を呼び出せたな。

ケルはそう心の中で呟きながらシギシヨアラを駆けていった。

教会にはシロウとキヤスターの二人が残されていた。

「……気付かれましたかね」

「怪しまれてはいるだろうな。よかつたのか、マスター。奴らをあのまま行かせて」

「仕方がないでしょう。まだ『星』の陣営が残っているのだから、い らぬ敵は作るべきではありません」

ジトリと見つめるキャスターにシロウは笑顔でそう答えた。

「——セイバーが抜けて戦力は大丈夫なのか？」

ここで、三人目の声が彼らの中に割入ってきた。

シロウ達が視線を向けた先には藍色の外套を纏つた、中性的な顔立 ちの青年が立っていた。

青年は黄金の瞳を真っすぐとシロウに向いている。

「大丈夫ですよ。セイバーの真名はラーマです。油断はできません が、もしもの時はこちらのランサー、アーチャー、バーサーカーの誰 かで当たれば十分に対処可能ですよ」

シロウは何故か、知り得ない筈のセイバーの真名を口にした。

しかしそれをさも当然とばかりに、キャスターも青年も気にしてい ない。

「……フンッ。まあいい。だが忘れるな。貴様が聖杯から遠ざかるよ うなことをすればこの同盟は直ちに白紙だ」

「わかっていますよ。私が諦めることはないので、安心してください」

そう言つてシロウは気が立つているらしい青年をなだめた。

あの天真爛漫にも程がある少女騎士に振り回されている青年に対 する同情が多分にあるのだろう。

シロウは召喚された『地』のサーヴァント達を改めて確認する。

『施しの英雄』

『幻馬を駆る騎士』

『ヘラの栄光』

『最古の毒殺者』

『オペラ座の怪人』

『湖の騎士』

——さあ、駒は揃った。

聖杯大戦を始めよう。

戦前——束の間の平穏

ミレニア城塞の眼下に広がる街トウリファス。

英雄達の大戦の舞台となるとは知りもしない人々が喉かな暮らしをしている。

その町並みの中を歩く三人の男女の姿があった。

「ねえねえスージー、ボク次はあれ食べたいな！」

「待てやライダー、テメエはもうあれだけ食つたろうが。マスター、オレはあつちのアイス？とかいうのが食いてー」

「アンタ達……んん、貴方達、もう少し遠慮してくださいませ」

一人は桃色の髪の少年。

脚を見せるハーフパンツとピンクのパークー姿。

一人は金髪の髪をポニーtailに纏めた少女。

腹部を見せるチューブトップに赤のレザージャケットを羽織っている。

一人は艶のあるピンクの髪の若い女性。

所々にピンクの模様が入った、落ち着きのあるスース姿。

元気溌剌な少年少女を新米教師が引率しているような雰囲気である。

手入れの整つた自分の髪をぐしゃっと握りしめた女性——スージーは溜息を隠さず吐き出した。

そもそも事の始まりは、この少年——ライダーが言い出したことにある。

☆

「お出かけしたい！」

突然ライダーが部屋に押しかけてきて第一声がこれである。

まず最初にスージーは頭を抱える。

「貴方、社長のサーヴァントでしょう。どうして私の所に？」

「いや、だつてボクのマスター、ボクそつちのけで地下に入り浸つてて

近寄りづらいんだもの……」

彼が言うにはマスターであるハルトマンが彼をほつたらかしているので暇を持て余してこちらにやつて来たそうだ。

さらに、話を聞いていたセイバーまでもが、

「いいじやねえかマスター。オレも連れてけ、暇だつたんだ」

と言い放つたこともあって、流石に自分のサーヴァントとは上手くやらねば聖杯大戦にも支障が出ることをわかっているスージーは渋々二人の付き添いという形でトウリファスの街へ繰り出したのだ。

とはいえ――

「あなたたち、どう考えても食べすぎですわよ……！」

英靈サーヴァントが無錢飲食で捕まるなど笑い事にもならない。

二人のここまで食事・娯楽の料金を払っているスージーは彼らの消費している金額が何度も見直そうが明らかに一人分のそれではないと愕然としていた。

「――だア～！　観光できるかと思つてたのに、全然目新しいもんがねえなアこの街は！」

ベンチにどかりと座り込み、買ったスナック菓子を頬張りながら不満を口にしたのはセイバー。

スージーがその隣に静かに座った。

「ま、諦めてくださいませ。城塞の眼下に広がる街ですもの、中世風じやなきや格好がつきませんわ」

「じゃあ明日はシギシヨアラとかいう街に……」

「シギシヨアラも中世の町並みが売りですわよ」

うげ、と声に出すセイバー。

どうにも、現代の建物を見られなかつたことが不満らしい。

そこへ、現地の子供達と戯れていたライダーが駆け寄ってきた。

――クレープを両手に持ちながら。

「お待たせー。……食べる？」

「おつ、気が利くじやねえかライダー」

ライダーからクレープを一つ奪い取つたセイバーは豪快にかぶりついた。

その様を見ていてスージーはハア、と溜息をつく。

——アタシはもつと、クールな剣士様をと思つてたのに……

スージーが触媒に使つたのは、ブリテンの円卓の欠片であつた。

アーサー王の下に集つた騎士達が囮んで語り合つたというだけあつて数多の騎士の触媒となる。

『湖の騎士』
〔サーランスロット〕

『太陽の騎士』
〔サーガウエイン〕

代表的な二人を挙げたが、この二人に限らずアグラヴェインやトリスタンといった騎士達も召喚されうる。

当然、『叛逆の騎士』^{モードレッド}とてその対象だつたのだろう。

(アタシはガウエインとかに来てほしかつたのに……)

食べれば食べるほど良いスキルを持つライダーはともかくもして、セイバーは単なる趣味のようなものなのだからもう少し自重して欲しいものである。

複数の英靈に該当する触媒の場合は相性の良い英靈が選ばれるそうだが、そうちとはこの時のスージーにはとても思えなかつた。



一方、シギショアラ。

中世の雰囲気が残る歴史ある町並みを歩く二人がいた。

一人は桃色の髪を三つ編みに束ねた少女。

一人は紫紺の外套を纏う、藍色の髪をした中性的な青年。

「わ〜……ねえねえマスター、これ可愛くない!? 食べるのがもつたいないな〜」

「ならば何故頼んだ」

動物を模したケーキを見て目を輝かせながら言う少女に対し青年の反応は淡泊だつた。

青年の名は内藤貴志。^{ないとうきし}

数十年前から名をあげているフリーランスの魔術師である。封印指定の魔術師を何人も仕留めた実績があるが、どのような魔術

を使うか全く知られない男だ。

その貴志はジトリと己のサーヴァントを見つめた。

視線を受けて“地”のライダー——アストルフォはキヨトンと見つめ返した。

アストルフォ。

シャルルマーニュ十二勇士の一人。

天真爛漫にして脳天氣の美丈夫とされ、幸運と数々の魔法道具で冒険を切り抜けてきた騎士。

そう貴志は、アフォガードにコーヒーをかけながら己のサーヴァントの事を再認識していた。

ライダーを召喚してから振り回され、ここ数日気の休まる時のかつた貴志は口の中に広がるアイスの味を噛み締めながら、また眞面目な顔つきに戻った。

「ライダー。そろそろ戻るぞ、シロウ神父と作戦会議だ」

「えーー。ボク、あのキヤスター苦手なんだけど……」

「ごちやごちや抜かすな。それでも騎士か」

ライダーは耳を引つつかまれてみぎやー、と声をあげてようやく、名残惜しげにしながらも喫茶店を後にした。

貴志はそんな様子を見て溜息を隠さない。

桃色の髪を靡かせながら歩く姿を、彼は誰かに重ねていた。

作られた願望（ユメ）

「何度見ても美しいものよな」

女王は輝く魔力の塊を眺めて笑った。

ダーニックもその言葉に静かに頷き、自らもそれを見つめる。

それは、一言で表すなら、小さな星。

もう十四騎もサーヴァントを召喚してなお輝く程に溢れている魔力。

魔術師と英靈が求める願望機、大聖杯——

——そう呼ばれていたものだ。

現在のこれを指し示す名称は、『星の夢』。

ゲインズ・ハルトマン・ユグドミレニアが破損した大聖杯に手を加えて作り上げた願望機である。

正確に言うと、破損して不安定な大聖杯を完璧に管理する膨大な魔術式なのだ。

「とはいえ、ハルトマン。貴様はただの願望機が望みではないと言つたな。何を創るつもりなのだ」

ダーニックはそう言つて振り向き、暗闇に佇むハルトマンを見た。

「ワシは……ノヴァを再現するのだ」

「なに？」

ダーニックは訝しげな視線をハルトマンに送る。

ハルトマンは気にもせずに続ける。

「ギヤラクティック・ノヴァを知っているだろう？」

「……彗星か」

ギヤラクティック・ノヴァとは、『春風物語』に登場した願望機だ。

曰く、それは『幸福を齎す彗星』。

神代の魔術師達の土地ハルカンドラにて製造された魔術品なのだ。数多の魔術師の家系がつくろうとしたが、どれもが不完全な模造品で終わっていた。

「ワシの一族はそのハルカンドラの流れを汲んできた家系である。ワシは完成されたノヴァの力で以て一族の、いや、人類の永久なる繁栄を手にするのだ」

「ハルカンドラ、か。妾も聞いたことがあつたな」

「女王陛下……」

キヤスターが口を開いた。

成程、キヤスターも『春風物語』に登場した、しかも魔術師だ。

それらの知識は生前からあるのだろう。

「しかし、ハルカンドラは我らの時代から存在が眉唾ものの土地、秘境であつたのでな。そこの出身と名乗る魔術師が城を訪れたことがあつただけじゃ」

キヤスターはそう、大したことはないと言い捨てた。

「しかし、かつてこれ程のモノを見ることはなかつたぞ。まさにこれは神の領域に迫る逸品ぞ」

「**恐悦至極**、である」

キヤスターの贊美を受けてハルトマンは頭を下げる。

「喜べ。そなたたちの願いは叶うであろう。なぜなら、我らには勇者がついているのだからな」

キヤスターは、ライダー——カービィのことを言つてているのだろうとダーニックは容易に読み取ることができが、わからなかつた。

——なぜ彼女は、自分を滅ぼした相手にここまで好意的でいるのか
が

☆

「——なア、マスターの願いつてなんだ?」

ふと、思い出したようにセイバーは同じ部屋にいる彼女に、そう声をかけた。

スージーは少し面食らつたように、らしくないキヨトンとした表情を浮かべていた。

「ほら、聖杯にかける願いだよ」

「ああ……」

セイバー——モードレッドが召喚されてから見てきたスージーという女は何処か余裕がない、というのが直感を合わせた彼女の見解だ。

命を懸ける戦争で緊張している、といふにしても過敏なのだ。

「私の願いは、そうですわね……社長の願いが叶うことですわ」

「なんだそりや。つまらねえの」

「……魔術師ですもの。そう言うあなたの願いは、一体なんですか？」
うまく話を返してきたスージーは、自分の所へ踏み込まれるのを避けているようだつた。

願いを問われたモードレッドは、勝ち気な笑みを浮かべて言つた。

「オレの願いはな、選定の剣に挑戦することだ」

「ああ、アーサー王が引き抜いたという……」

「そうだ」

カリバーン。

ブリテンの王となる者のみが引き抜くことができるという岩に突き刺さつた選定の剣である。

これを引き抜いたその瞬間、アーサー王の栄光と、その結末は決まっていたのかもしぬれない。

「あの父上は、最期までオレを認めなかつた。……オレの方が、武勇も、^{まつりごと}政も、全てにおいて優れていた筈なのに！あの王はオレの出自を理由に、嫡子と認めることがなかつた！」

父に認められることがなかつた。

声を荒げてそう叫ぶモードレッドにスージーはどこか遠い目をしていた。

「……たとえオレが聖杯などの力で王になろうとあの人はオレを認めない」

「そう。だから、選定の剣に挑むと、いうわけですわね」

「そういうことだ」

「——もし引き抜けなかつたらどうするつもりですの？」

モードレッドはこの問いに、分かりきつたことを聞かれた子供のよ

うな小馬鹿にしたような顔をして答えた。

「オレはアーサー王の唯一にして正当なる後継者だ。引き抜けない筈がない」

「そう、ですか……なら、その後継者様に相応しい戦い、見せてくれることでよろしいですわね」

「当つたり前よオ！ 父上の息子たるオレが勝つのは、当然のことだ」自信満々に答える様子に、偉大な父の子であると言える彼女に、スージーは——羨ましいと感じていた。



「ウウウ……！」

「スウ……むにや……！」

純白の花びらが舞う城塞の一角に唸り声と寝息が響いていた。

音源は、花嫁姿の少女——バーサーカーと桃色の髪の少年——ライダーである。

「ウウ——！」

バーサーカーは花畠を自分の領域だと主張しているようだ。

唸り声をあげながらライダーを激しく揺さぶっている。

それでもライダーは口の端から涎をたらしただらしない顔から変化がない。

「……もう、食べられないよ……！」

「ウー！」

バーサーカーが実力行使に出てポカポカとライダーを叩き始めた頃に、彼女のマスターであるカウレスが姿を現した。

「ん？ おいおいバーサーカー、どうしたんだよ」

「……ウウウ

「…？ ああ、ライダーか」

カウレスは爆睡するライダーを指差すバーサーカーと周りの様子を見て何が言いたいのかを大まかには理解した。

ここは先日バーサーカーと話した場所だ。

彼女の願いを確認した時に、花を渡されたのは記憶に新しい。

どうやら、その時からバーサーカーはここを気に入つたらしく、だからライダーが花畠のど真ん中で眠り込んでいるのが面白くない、ということなのだろう。

バーサーカーをカウレスが宥めようとしているうちに、どこからともなく茜色の蝶がひらひらと飛んできた。

それは軽やかにバーサーカーの前を横切り、白い花の間を抜けて、ライダーの鼻にピタリととまつた。

「……ウ」

どうやらそれに興味が移つたらしいバーサーカーはそつと音を立てずに近寄つて、ライダーの顔を覗き込むような形になつてジツと蝶を見つめ始めた。

一先ず落ち着いたらしいバーサーカーにカウレスが胸を撫で下ろしたのも束の間。

「ふあ、ふあつくしょん!!」

なぜか刺激されたライダーの鼻腔は唐突にくしゃみを引き起こした。

バーサーカーは、飛び退いて、当然蝶は驚き飛び立つてしまつたのである。

「ふあああく。よく寝た……」

「ウゥウウ……！」

「ん、バーサーカー？」

彼方へと飛び去つた蝶を見送つてから向き直つたバーサーカーは低い唸り声とともに身構えた。

「ウアアアアア！」

「ええーー!? 待つて待つて、ボクなにかしたのーツ!?

「……………ハア」

飛び掛かつたバーサーカーに好き放題されるライダーを見ながらカウレスは苦笑いして、溜め息をついた。

バーサーカーを信頼してか、カウレスはその場に座り込みしばらく彼らのじやれあいを見守ることにした。

彼らのじやれあいはセイバー主従が来るまで続くことになる。

太陽と春風

現世に生きる少女に憑依する、という少々特異な形で顕現した
裁定者、ジャンヌ・ダルク。

彼女は14対14という前代未聞の戦い——聖杯大戦の舞台トウ
リファスへと向かっていた。

ヒッチハイクをしてトウリファスに向かうルーラーは、そのクラス
の為に高い感知能力で、サーヴァントの気配を感じとつた。
そして、そのサーヴァントの戦意も。

車を降りて歩き始めれば、すぐにその姿は見えた。

黄金の鎧を纏つた、大槍を携える青年だ。

「——ルーラー、だな」

「……『地』のランサーですね」

ルーラーは静かに戦装束に換装し、ランサーは軽やかにアスファル
トに降り立つた。

真っすぐにこちらを見つめ、戦意をぶつけてくるランサーに、ルー
ラーはキッと引き締めた表情で対峙する。

「ランサー。私を害することに何の利があるというのですか」

「知らぬよ。オレはマスターに、此処でお前を仕留めよと、命じられ
た」

それだけだ、と何の感慨も見せず告げるランサー。

やむを得ないとルーラーが旗を構えたその瞬間——

「うわああああ!!どいたどいたア!」

「ム、オオオオオオ!」

ランサーのいた地点を星が通り過ぎた。

咄嗟に飛び退いたランサーを尻目にガリガリと地面を削りながら
徐々にスピードを落とす謎の星型の飛行物体には、簡素な革の衣服を
纏う少年と紫髪の男が乗つていた。

「ふいーーー、危ない危ない。久しぶりでテンション上がっちゃつた
な!」

ポンと降りてきたのは桃色の髪の少年。

朗らかな笑顔で、今張り詰めていた空気が何処かへ吹き飛ばされてしまつたように、ルーラーもランサーも言葉を失つた。

「……“星”の、ライダーですね」

落ち着いたルーラーが少年をそう呼んだ。

「うん。そう、ボクこそは“星”的ライダー！」

「そしてワシがそのマスター、ゲインズ・ハルトマン・ユグドミレニアである。お初にお目にかかる、ルーラーよ」

少々よろめきながらも星から降りてきた男——ハルトマンは整つた佇まいに声をかけた。

そしてその打算に満ちた視線を静かにランサーに向ける。

「“地”的ランサー。貴様がルーラーを殺害しようとしたのを我らは見たぞ。裁定者たるルーラーを害そうなどルール違反の極地にあるであろう。大人しく、我がライダーとルーラーの沙汰を受けるがいい」

そう珍しく意地の悪い笑みを浮かべながらハルトマンはランサーを再度睨みつけた。

ランサーは特に釈明するでもなく、寡黙な様子で槍を構える。

落ち着いた場でルーラーは——

「“星”的ライダー、“地”的ランサー。此処で戦うのならば異存はありません。私が手出しすることはありますんで存分に力を振るつてください」

「……ム?」

参戦しないと、宣言したのだ。

今までに襲われようとしていたのは自分だというのに。

ハルトマンは一瞬啞然としたが、すぐに冷静さを取り戻すと蓄えた髭をゆっくりと撫でた。

「では、ルーラー。貴女はライダーが万一敗れたときどうなさるおつもりか」

「それはそれです。私の事情を考慮して彼らの戦いに介入することは裁判者として召喚された誇りにかけてできません」

「…………」

どうやら言つても無駄らしいと察して黙り込むハルトマン。

それを見ていたランサーとライダーは向き直つた。

「——どうやら、お前と二人で殺し合えるらしいな。ライダー」

「そうみたいだね。ランサー」

にこやかにしているライダーは懐からナイフを取り出した。

神秘の欠片もない、年季がある品というわけでもないそれをどうするつもりかと思えば、変化はすぐに訪れた。

ナイフが、彼の魔力に覆われてしなやかな剣に変貌したのだ。

もはや、それは宝具の域に達している。

間違いなく宝具の能力か、彼の固有スキルによるものだ。

何の変哲もないナイフがサーヴァントを傷つけられる武装に変化した様を目の前で見たランサーは特に驚いた様子もない。

ライダーは静かに剣の切っ先をランサーに向けた。

いつまで続くかわからぬ静寂が引き裂かれる様は呆気なかつた。

「ツ!?

いつの間にか飛び立っていた星が再びランサーの背後から襲い掛かつたのだ。

それはランサーの背に直撃して遙か遠くの岩山に突っ込んだ。

しかし星は速度を落とさずライダーへと向かう。

ライダーは軽く飛び上がり、星の中央へ軽やかに着地した。

これこそライダー——カービィの宝具「^ワ宙に輝^ブ走^スる流星^タ」である。

ライダーはそのままランサーを吹き飛ばした方向へ一直線に向かう。

今のワープスターの突進だけでも並の英靈を充分殺せる威力だったが、岩石さえ焼き尽くして現れたのは無傷のランサーだった。

それが当然であるかのようにライダーは間髪入れずに剣を構えて、ランサーへと突進する。

——鋭い銀と輝く黄金が交差した。

ランサーは静かに驚嘆していた。

彼のその超人的な技量によつて放たれた七十を超える槍撃を受けながら、ライダーには大きな傷はない。

「浅い……いや、再生しているのか」

ランサーが呟いたように、ライダーの傷はみるみるうちに塞がつていいく。

これはライダーの保有スキルの一つ、『星の胃袋』の効果である。大食らいだという伝承から発展したスキルであり、あらゆる存在を食べて自らに反映してきた彼を象徴するスキル。

彼が摂取した存在は全て魔力に変換されるのである。この魔力を単純に補充に使つたり、再生に回すことでライダーは力を發揮する。

ちなみに、特に変換効率が良いのはトマトである。

しかし、彼を回復頼りの軟弱者と侮つてはいけない。

ランサーの槍撃は全てがまともに受けければ致命傷にいたる威力だつた。

つまり、尋常ではない防御力を持つならばいざ知らず、ただ再生するだけならば損傷ダメージに回復が間に合わないので。

現在ライダーが傷を癒している様子は、彼がランサーの七十の槍撃を凌ぎきる技量を持つことを示していた。

——ありえない。

ほんの一瞬、そんな考えが脳裏を過ぎるが、すぐに思考の波でそれを搔き消した。

懐かしいとさえ思える強敵との邂逅は、生前の唯一の好敵手との戦いを想起させた。

ワープスターに乗つて様子を伺いながら、ライダーは表情を引き締めていた。
(あの槍、とても速くて、重い。速さはメタナイト級、威力はデデデ級かな)

静かに、ランサーの技量を分析していた。

いや、とライダーは自分の記憶を思い返した。

たつた一人、凄まじい実力の者がいた。

——銀河最強の戦士

ギヤラクティックナイフ

紙一重の死闘を思い起こさせるこの敵は、珍しくライダーを、言うなれば燃えさせた。

もとよりこれが戦い、殺しあう儀式とはいえ、なんだかんだでこの少年も一端の戦士なのである。

ランサーの上空を旋回するワープスター。

金粉のような淡い光を振り撒きながら輝く星の夜空を、一瞬昼間に戻つたかと錯覚させる赤い光が包み込んだ。

ランサーのスキル『魔力放出』である。

その燃え盛る炎となつた魔力を噴出してランサーはワープスターの目前に迫つていた。

当然、避ける間はない。

再び、銀と黄金が夜空に軌跡を描いて互いを狙う。

ワープスターの先端に飛び乗つて身の丈程もある槍を軽々振るうランサーも、そもそも全体で見ても広くないワープスターの上で器用に跳ね回りながら斬り返すライダーも、間違なく一級の英靈であつた。

☆

やがて、山の隙間から朝日が差しはじめた頃。

ライダーとランサーは千日手に陥つていた。

互いに一度間を置くべく距離を取り、最初に対峙していた地点に戻つてきた。

「…………このままでは日の出まで打ち合うことになりそうだな」

ランサーが淡々と所感を述べる。

朝になれば此処も人が通る。そうなれば神秘の秘匿も守られない。それは魔術師である彼らのマスターにとつて本意ではない。

「…………うん。名残惜しいけど、ここが限界かな」

ライダーもランサーの言葉を肯定した。

ランサーは槍を下ろし、ライダーの剣はいつの間にかただのナイフに戻つていた。

ランサーは相手にもこれ以上の戦意がないと確認すると、背を向けて立ち去ろうとした。

「——またね、ランサー！」

その背に、そんなライダーの声がかけられた。

ランサーは少し、戸惑ったような、驚いた顔をして——

「お前は……不思議な男だな」

靈体化して去つていった。

朝日を見つめて立ち尽くすライダーにルーラーが歩み寄ってきた。

「見事でした、『星』のライダー。さすがは春風の勇者、ですね」

「うううん。なんかそんな風に呼ばれるのは照れ臭いな……」

そんな彼に不機嫌そうなハルトマンが視線をぶつけてくる。

「戻るぞ、ライダー」

「あ、はーい。じゃあねルーラー」

来ていた車に乗り込んで二人は去つていった。

これは緒戦。

聖杯大戦の序章にすぎない。

戦場（いくさば）に戦士二人

“地”のセイバー主従はシギシヨアラにて朝食をとつていた。

セイバーはやはり王族だからか、高級レストランでも恥ずかしくないような行儀のよい食事の様子であつた。

「さて、食つた食つた。夜にはトウリファスに向かうからな」

「…………」

「あん？ どうしたセイバー。お前が言うから現代の服を買つたんだろ？ うが」

今 のセイバーは赤を基調としたウェスタンシャツの上に黒のライダースジャケットを羽織り、下は紺色のカーゴパンツ、といった服装である。

浮かない顔をした相棒にケルが心底不思議 その 視線を向ける。

「…………マスター、汝がその服を買うとき店員の者になんと言われた？」

「ん？ ……『お子さんですか？』だつけか？」

「不服だ！ 余は偉大なるコサラの王ラーマである。天寿も全うしたというのに子供扱いは流石に酷いぞ！」

「でも今は子供みたいなもんだろ。つーかここで真名を口に出すな」ケルは服を買う際お節介な店員ににこやかにそう問われたのだ。

この問いにケルは『まあ……誕生日プレゼントに』と答え、そこの店員に根掘り葉掘り聞かれてはることないこと答えたのである。顔を自身の髪のように真っ赤に染めながらセイバーが抗議するもケルの態度は完全に駄々をこねる子供に相対する大人のそれだった。「マスターも何故あそこで肯定したのだ！」

「仕方ないだろ、あの質問にどう答えればよかつたんだ。サプライズプレゼントにでもしねえと怪しさ満点だろうが」

「むう……余は、余はあ……」

サーヴァントは全盛期の姿で生前の全ての記憶を持つて召喚されるという。

少年の頃の精神が老年並の知識に追いついていない故の弊害だろ

う。

しかし傍から見ると完全に『もう子供じゃないのに……』といじける子供である。可愛い。

セイバーが機嫌を直すのにケルはしばらく手を焼くことになる。



シギシヨアラの教会。

大きく開け放たれた窓から一羽の鳩がやつてきて、『地』のキヤスターの腕に優しくとまつた。

「——ふむ。マスターよ、セイバーの主従はトウリファスに潜入するようだぞ」

「この行動力、流石ですね。トライフと言えば戦士の血を引く家系だと聞きましたが、真ということですね」

「それで、どうするつもりだ?」

キヤスターの報告を微笑みながら聞くシロウに貴志が单刀直に入り問う。

ちなみに彼のサーヴァントであるライダーは部屋の隅で迷い込んだ猫と戯れている。

「我々も動きましょうか。貴方のライダーと、そしてアーチャー、バー

サークーに協力の要請を」

彼らの様子を見てから、出撃していただきます。

シロウがそう言うのに貴志はわかつた、と短く返事をし、ライダーを引っ張つて消えて行つた。

「クク、精々奴らが引っ搔き回してくれればよいのだがな」

キヤスターがそう妖艶に笑う隣で、シロウは策を巡らせる。

「連続殺人の犯人と目される『星』のアサシンも気になります。蛇の道は蛇。そちらは彼に動いてもらいましょうか」

「奴を動かすのか? バーサークーは当然だが、奴も相当狂つているぞ」

「言葉を間違えなければ大丈夫です。彼はなによりマスターを大事に

しています」

「……マスター、そなたも中々人が悪いな」

「おや、心外ですね」

唐突にキヤスターにひとでなしと言われ、苦笑いしながら否定するシロウ。

キヤスターは黒いドレスを揺らしながら歩み寄る。

「あの狂った怪人はいつ暴発するか知れぬ爆弾だ。もとより目的を達すると同時に消えるよう使い潰すつもりであろう?」

「確かに、そういう意図もないわけではありませんが、彼が願うのは果てなき恋心の具現。その一念で、もしや大立ち回りを見せてくれるかもしれませんよ?」

事実、私も私の一念を持つてここまでやつて来ましたしね。

なんのことはない、そう言つて除けるシロウの様子に嘘ではない、とわかつてしまうキヤスターはただただ溜め息をついた。

☆

夜の闇に包まれたトウリファス。

中世の町並みを赤い影が疾駆する。

その正体は言わずもがな、セイバーである。

彼の後にケルが続く。

体操選手でもそうできぬ動きで町を駆ける彼らは、ちょうど一際高い建物の上に立ち止まつた。

「マスター、汝も魔術師にしてはなかなかの身のこなしだな」

「鍛てるんでね。手足にルーンを刻めば追いすがるくらいはできんでもないさ」

セイバーの称賛を受けるケルが、そう言つて裾を捲り脚にいくつも刻んであるルーン文字を見せる。

「強化、硬化、まあ他にもあるが組み合わせでどうにでもなる」

「フム……余は魔術師ではなかつた。故にあまり詳しくはないが、なかなか応用が——」

不意に、セイバーが言葉を切った。

ケルも体勢が変わる。すぐにでも走り出せる体勢だ。

セイバーもすぐに武装して、隙のない戦士の装いとなる。

「……どうする？」

「やるしかねえだろ」

ぞろぞろと姿を現すのは人間性を感じさせぬ無表情の兵士——ホムンクルス達と、その彼らを一人合わせても足りぬ巨体を誇る異形の戦士。

キヤスターが昆虫から作り出す使い魔『アントラ』である。

千界樹の軍団に包囲された二人に恐れはなく、ただ勇ましい笑みを浮かべていた。

「さて……お前の力、見せてもらうぜセイバー！」

「——ああ、承知した、マスター！」

ラーマの如く

聖杯大戦第二戦。

その火蓋はあっさりと落とされた。

セイバーは敏捷A+のステータスに恥じない素早さで町を駆ける。彼の行く手に立つアントラー達がその手の杖を振りかざした。無数の魔力弾がセイバーに直撃、あるいは建物を抉った。爆煙が辺りを包むが、そこから飛び出した赤い人影。

——やはりセイバーだ。

三騎士の一角でありAランクの“対魔力”を持つセイバーにはたかが使い魔の操る、単調な魔術程度、通じはしない。

怪物でありながらそれを理解したのか、迫るセイバーを迎撃すべくアントラーは杖と盾を構えるが、もう手遅れだつた。

彼らが纏う鎧など容易く切り裂かれ、巨体が地に伏せる。

数体の、蟻のような怪物達の屍を踏み越えて、セイバーはその剣を振るう。

ケルは背負っていたゴルフケースを素早く開き、中から棒——いや、槍を取り出した。

何かの骨でつくられているらしいその槍には無数のルーンが刻まれていた。

「こいつを使うのは久々だ」

ケルはそう軽く言いながら槍を構え、斧槍ハルバードを向けて迫るホムンクルスを迎撃つ。

先頭に飛び出してきた一体と一合打ち合い、ケルはすぐに下がる。こちらは一人、敵は無数。

一人一人とまともに打ち合つていれば囮まれて終わりだ。路地に入つて軽くゴミ入れを飛び越える。

その時、いつの間にか片手に持つていた、ルーンを刻んだ小石を後ろに放る。

〔アンサズ
a n s u z〕

刻まれていたルーンが光を放ち、瞬間、追つて来ていたホムンクルス達が火に包まれた。

しかし焼き尽くすには至らないその火に包まれた同胞を踏み越えて新手が迫る。

ケルが消えた曲がり角に向かうホムンクルス達は踏み込んで、ようやく気づく。

この一帯の地面、壁に刻まれていたルーンに。

「t^スh^リu^ザr^スi^スs^スa^スz」

イバラの棘の意味を持つそのルーンが発動して、ホムンクルス達は、丁度この国の英雄が行つた所業を再現するが如く串刺しにされた。

目の前で串刺しにされた仲間を見て流石に怯んだホムンクルスの一体に、鋭い槍が突き刺さつた。

ルーンが形成した茨の合間を縫うように放たれた、ケルの投槍である。

この槍は、魔獸の骨を削つて作られた、彼の家に伝わる槍である。神代から代々ルーンを刻みつづけて強化してきた槍は、単純に宝具級の神祕を秘めているのだ。

ケルは魔術師ではなく戦士であると教えられ、武術を叩き込まれてきた。

素早く槍を胸元に生やしたホムンクルスから引き抜き、後続の者達にそれを振るう。

長物は閉所では不利であるのが常識だが、ルーン魔術を併用して隙を潰し、巧にホムンクルスを蹴散らしていくた。

☆

ミレニア城塞、王の間。

全てのマスターとサーヴァント達が集まり、魔術で映し出された光景に目を向けている。

「筋力A、耐久B、敏捷A+、魔力B、幸運B、宝具A……どの能力も

高い水準を誇っています。流石は、セイバーと言つたところでしょ
う」

マスターはサーヴァントのステータスを見ることができる。

ダーニックは赤毛のセイバーの能力値の高さに感心したように、玉座に座る女王に伝える。

「ふむ。……もとより英^{サーヴァント}靈に勝てるとは思つていなかつたが、我がアントラーダー達がここまで容易く討ち取られるとはな」

キヤスターが、いつそ突き抜けた清々しさを感じながらそう呟く。
ランサーは好戦的な笑顔をしながら口を開く。

「へつ。なかなかできるんじゃねえのか。俺を殺せるかねえ」

「ランサー、慢心は身を滅ぼしますよ。貴方の不死身の身体が破られぬとも限りません」

「わかつてるつて」

「…………」

軽口を叩くランサーに歯がみするゴルドと、窘めるアーチャー。

キヤスターはライダーにその目を向けた。

「勇者よ。そなたは『地』のランサーとも戦つたが、セイバーとどちらが強いと思う?」

「うーん……ランサーは尋常じやなかつたけど、セイバーも大概、かなあ。宝具がわかんないと実戦では何とも言えないね」

ライダーの言葉は、向けられた問いに、彼には珍しい煮え切らぬ答えた。

「ふむ……アーチャー、そなたはどうだ?」

「ええ。私もライダーと同じ見解ですね。強敵ですがステータスも、マスターの魔術も判明しています。後は宝具の性質がわかれれば、過度に恐れる必要はないでしょう」

次に声をかけられたアーチャーも穏やかな声色でそう言つて除けた。

「ダーニックおじさま。あのセイバーのマスターは……」

「ああ。ケル・トライブ、イルランド出身のルーン魔術の使い手だ」「フン。崇高な魔術を、棍棒か何かと勘違いした野蛮人か」

ダーニックが解説したセイバーのマスターの情報に、ゴルドは軽蔑を隠さずに言葉を吐き捨てた。

そのゴルドにステジーはあら、と声をあげる。

「ゴルド様、こと戦闘においてはああいう手合いの方が厄介ですわよ。というか、敵を見くびつた者から、容易く崩れていくと相場は決まっていますわ。口には気をつけた方がよろしいかと」

「ツ……小娘が……！」

「まーまーマスター、抑えろ抑えろ」

ステジーの挑発的な言葉に青筋を立てるゴルドを宥めるランサー。セイバーは退屈そうに魔術モニターを見つめている。

「あーあ、オレも早く戦いてーなー。な、フラン」

セイバーはボソリとそう呟き、バーサーカーに同意を求めたのだった。



トウリファスの夜もふけた頃合い。

そこには無数の屍が転がっていた。

「フーッ。『クーフーリンの結婚』は高望みだつたかね」

返り血を浴びて身体を朱く染めたケルは槍をケースにしまい込む。剣をぶん、と一振りして、セイバーが彼に歩み寄る。

「……汝もなかなかの勇士だな。共に戦う者として誇らしいぞ」

「そりやあ光榮だね。伊達に槍振つちやあいねえもんだ」

互いを背中を預けるに足る戦士と、認める主従であつた。